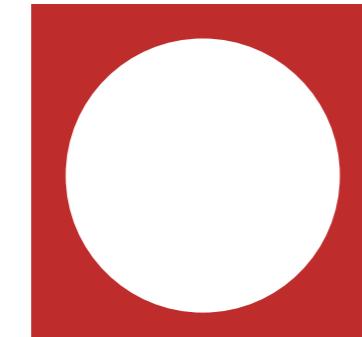


テキスタイルレポート
今治
 いまばり
 Towel & Toweling



imabari towel

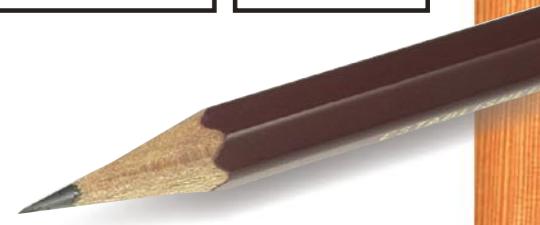
VOL.09
 2007.03
 TAKE FREE 0円

テクスポート今治
 に来ればわかる!!

今治タオルQアンドA

| | |
|----|--|
| 氏名 | |
|----|--|

点



| | | |
|-----|--|---|
| 問1. | 国内で作られた10枚のタオル。この内、今治で作られたタオルは何枚だと予想されますか? | 答 |
| | 1. 3枚 2. 5枚 3. 6枚 | |

| | | |
|-----|---|---|
| 問2. | 今治西高校の宇高幸治選手が、2006年の日米親善高校野球で、チームメイトに配ったタオルハンカチの色は? | 答 |
| | 1. グリーン 2. ブルー 3. イエロー | |

| | | |
|-----|--|---|
| 問3. | テクスポート今治には、市内唯一のタオルアンテナショップがあります。ここには、何社のメーカーがはいっているでしょうか? | 答 |
| | 1. 10社 2. 22社 3. 33社 | |



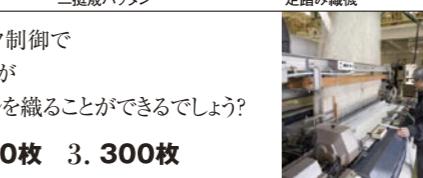
| | | |
|-----|----------------------------------|---|
| 問4. | 通気性や保湿性に優れた生地の長所を活かした、最近、人気の商品は? | 答 |
| | 1. マフラー 2. 手袋 3. バッグ | |

| | | |
|-----|--|---|
| 問5. | テクスポート今治では、お気に入りの写真をつかったタオル(マイフォトタオル)が簡単に作れますか?何枚から作ることができるでしょう? | 答 |
| | 1. 1枚 2. 5枚 3. 10枚 | |

| | | |
|-----|-----------------------------|---|
| 問6. | 日本で最初にタオルを織った機械はどれ? | 答 |
| | 1. ヒゴ織機 2. 二挺簇バッテン 3. 足踏み織機 | |



| | | |
|-----|--|---|
| 問7. | この機械はコンピュータ制御でタオルを織る機械ですが、1日に何枚のバスタオルを織ることができでしょう? | 答 |
| | 1. 100枚 2. 200枚 3. 300枚 | |



答え

問1. 正解: 3.
 今治は全国のタオルの生産量60%という、日本一の生産量を誇ります。明治27年から始まる歴史と、その秘密を知りたい人は文献資料館で、お勉強しましょう。

問2. 正解: 2.
 日本選抜には、あのハンカチ王子こと早稲田実業の斎藤佑樹投手も、タオルハンカチに注目が集まっていた時期で、全国から、オーダーと問合せが殺到したとか。。。欲しい人は、アンテナショップへ。

問3. 正解: 3.
 (2007年2月現在)
 わざわざ各メーカーを巡ったり、問合せる事なく、ここに来れば、メーカー自慢の最新作や話題作が手に入ります。

問4. 正解: 1.
 空気を含むので暖かさが違います。
 触ってみれば、わかります。

問5. 正解: 1.
 写真だけでなく、イラストでもOK。そのまま、タオルに再現されます。フェイスタオルで1枚2100円、バスタオルで4200円です。お土産やプレゼントにも喜ばれます。(完成後、郵送してくれます)

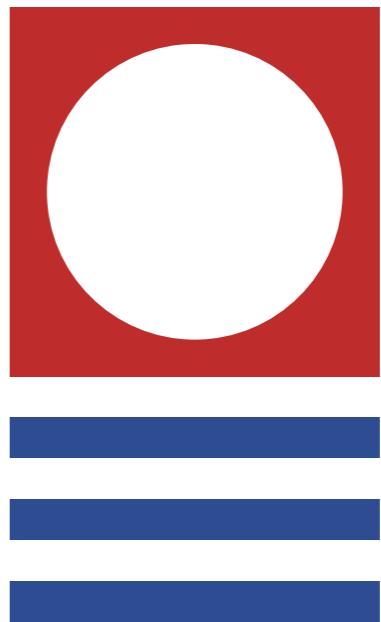
問6. 正解: 1.
 1番と3番(足踏み織機)の織機は現在も動きます。また、体験もできます(要予約)。

問7. 正解: 2.
 この機械は見学できます(もう1台、タテ糸を巻く機械も)。タオル製造のスピードの早さにビックリです。



テクスポート今治

愛媛県今治市東門町5丁目14番3号(今治城から東へ700m)
 ☎0898-23-8700
 イベントホール有



imabari towel

このマークは、世界最大のタオル産地、今治のメーカーをとりまとめる「四国タオル工業組合」が付与します。独自の認定基準に合格した、最高品質のタオル商品であることを保証するマークです。

世界最大のタオル産地が生まれ変わる

今治タオルは、地域に脈々と育まれてきた確かな技術・経験に裏打ちされた品質と温もりに満ちたタオルです。温暖な気候と水に恵まれて発展した百十余年の歴史と伝統を受け継ぎながら、日々技術開発に努める中で先進的な商品づくりに挑戦してきました。その今治タオルがJAPANブランドとして新たな輝きを放つべく、世界を視野に新たな一步を踏み出します。既存の枠組みにとらわれず、地域ブランドのNEW-STYLEをめざすimabari towelにご注目ください。



佐藤可士和 Kashiwa Sato

アートディレクター/クリエイティブディレクター
1965年東京生。博報堂を経て「サムライ」設立。

スマップのアートワーク、キリン極生の商品開発から広告キャンペーン、TSUTAYA TOKYO ROPPONGIのVIと空間ディレクション、ファーストリテイリング、楽天グループ、明治学院大学のブランディング、NHK教育「えいごであそぼ」のアートディレクション、NTT DoCoMo「FOMA N702iD」のプロダクトデザイン、ユニクロNYグローバル旗艦店のクリエイティブディレクション等、進化する視点と強力なビジュアル開発力によるトータルなクリエイションは多方面より高い評価を得ている。最新の仕事は国立新美術館のVIとサイン計画。東京ADCグランプリ、朝日広告賞、亀倉雄策賞ほか多数受賞。

先進的・日本×品質感・伝統×タオル・可能性

モチーフに用いたのは、タオルの原料生産と加工に適した今治の恵まれた美しい自然「太陽」「海」「空」「水」。象徴的に採用した「白」は「空に浮かぶ雲」と「タオルの優しさ・清潔感」を。「青」は、「波光煌めく海」と「豊かな水」を。「赤」は「昇りゆく太陽」と「産地の活力」を表します。各々の色のイメージを重ね合わせ、新しいJAPANブランドとしてのメッセージを託しました。

今治タオルについて思つこと

今治タオルは、地域に脈々と育まれてきた確かな技術に基づく圧倒的な品質と信頼感を誇るタオル。温暖な気候に恵まれてタオル産業が発展した100年余の歴史と伝統はもちろん、様々なメーカーが日々技術開発を進める中で生まれた先進性その魅力のひとつ。そんな今治タオルが今、JAPANブランドとして、新たに活動を開始する。既存の枠組みに捕らわれず、地域ブランドの新しいあり方を提示するような存在。タオルに関する多様な情報を発信し、そこに人々が集い、また新しいものが生まれる可能性のある日本のひとつ新的「顔」。それは日本の地域ブランドにとって、社会にとって、大きなニュースであり、とてもインパクトのある存在になるであろうし、また、そうならないればならない。

そんな今治タオルのネーミングやシンボルマークは、商品と共にその「クオリティ」「先進性」「独創性」「安心感」「優しさ」を象徴した表現でなければならない。そして、この今治タオルブランドディングプロジェクトに關わる人々の心に共通して流れれる想いを集約し、今治から日本へ、日本から世界へ、現在から未来に向けてのメッセージを社会に発信できるような表現でなければならない。

正直に言って、この仕事を受けるまで、

「タオル」や「今治」について考える」とはなかつたと言つていい。今治タオルといえば、そういうえば昔、教科書の中でも地方の特産品として習つたような記憶があるという程度。自分が日常で使つているタオルの产地を気にしたこともない。毎日の生活中で、自分が選ぶタオルの販売ブランドには「だつても、产地ブランドまで気にしている人は、ほとんどない」といつでも過言ではないと思う。だから予想以上に今治タオルというブランドイメージを確立し、浸透させていくことは難しいことである。長期的な戦略を立て、継続的にひとつひとつの施策を積み上げていきながら、大きなブランドイメージを定着させるのは困難だ。一方で、「関あじ」「関さば」や「タ張メロ」などの知名度、定着度はすごい。メロンなどはタ張以外の産地を挙げろと言われても、答えて詰まってしまう程だ。また、最近では「岡山デニム」や「新潟の研磨」。世界の名だたるハイブランドのジーンズは岡山デニムから作られているとか「の研磨は新潟の高い技術をもつて実現した」というニュースを聞くと、素直に日本人として嬉しい、誇らしい気分になる。まさにそういう地域の技術、ブランドの集合体が日本というのだ。今治タオルの「ブランドディング」は、

今治を通して日本のブランディングに貢献するようなプロジェクトだと思うし、そういう存在にならなければならぬ。そのためには、世界で通用し生き残つていけるような戦略とアイデノティティーが本当に重要だ。何故なら、この情報化社会の中、世界中の人々は大量の情報を得て、それを消費し続けている。ブランドとは、単にファッショやトレンドではなく、まさに情報そのものだ。価値ある情報をつくりには、他に勝るタオルの品質とか技術というスペック的な要素が不可欠なのは当然のこと。それを如何に強く社会にコミュニケーションをインテラクティブとして、ブランドに接觸し、イメージを蓄積していく。ブランドのネーミングとそれを視覚化する。それには強いアイコンが必要。人々はそのアイコンをインターネットとして、ブランドに接觸し、イメージを蓄積していく。ブランドのアイコンとなつて、今治タオルのイメージを牽引していくのだ。

先日購入した今治タオルを最近使っている。その品質には、納得できるインパクトがあった。これまで自分が使っていたタオルと真剣に比べてみると、まずそのやわらかさと優しさに気付き、心地よかつた。そしてきっと他にもすごく高品質で使ってみたいようなものがあるに違いないと期待感が膨らみ、すごくいいなと思った。シンボルマークのデザインも、そうあるべきだと

朝、シャワー。夜は、風呂。家で原稿書き

している時など、数回はシャワーを浴びて
いるし、シナリオを一本書き上げようとな
ると、都内のホテルの一室に閉じ籠るか、
いつも遠出して温泉宿の客となる。狙いは
何時でも、其処にお湯がある、という事だ。

風呂好き、である。理由は? と我に問
うてみて、笑った。タオル好き、なんである。

素っ裸になつて、全身にお湯を浴びて、然る
後に、タオルにすっぽり包まる。もう赤
ん坊に戻つた様に、嬉しくてここに笑って
いる。「こんな幸福な事は、他に無い。

タオルは、母親の掌に似ている。優しい
母の肌に似ている。産湯の記憶は、人間に
とって最も幸福な記憶である筈だが、残
念ながら誰にもその記憶は無い。だからタ
オルにすっぽり包まれた時、ぼくらはその
失われた愛しい記憶を思い出す。全身で、
思い出す。今此處に生きている悦びを思
出す。これから始まる日々に希望を托す。
生まれたばかりの赤ん坊の様に、幸福で、
元気になる。人間には、そういう幸福を作
り出す、力があるのだ。

文明は、道具である。例えば或る種の動

物にとって、尖った牙や、鋭い爪、厚い毛
皮の様なもの。それによって身を守り、助
け、種の保存、発達を願う。「裸の猿」とも
呼ばれる人類は、文明という道具を身に
纏う事で、全世界の生命の長となって來
た。その道具の多くは、敵と戦い、減すた
めの武器であり、それが余りに行き過ぎた

論、美術部の管轄。

これら様々な部署が全員揃つて打合せ
をして事を始めるからいい様なもの、忙
しくなつて来るとそうも参らない。で、撮
影当日、一齊に皆が顔を合わせてみたら、
衣装も帽子も靴も、部屋の壁紙もベット
カヴァーも、総てが鮮やかな、燃える様な
オレンジ色に統一されていた、という珍事

がために、今や自らの存在をすら危うく
しようとしている中、「方で」このタオルの

様な、穏やかで、平和で、心から我を守り、
励まし、育ててくれる道具をも生み出し
得る。これは、人類の持つ知性・賢さでこそ
あるだろう、と思われる。

話題をちよと変えましょ。映画の撮

影現場ではね、タオルは同じ仲間の様な手
拭とは、全く別種の存在なのです。例えば
新米の助監督さんが、うっかりタオルが欲
しくて衣装部に借りに行くと、昔は物を
知らぬと非道く叱られた。衣装部に大切
に保管されているのは手拭の方であり、タ
オルは小道具部の管轄であるからだ。即
ち、手拭は浴衣など、衣装の一部。それに対
して、タオルはシャワールームや浴場の一角
に置いてある一つの小さな道具。

昔、映画が大きな撮影所で量産されて
いた時代には、こういう風に道具を整理
整頓して管理する事が、現場の動きをス
ムーズに行つたためには必要だった。だから
何と、帽子や靴なども衣装部とは別扱い。
その人物が住む部屋やベットカヴァーは勿
論、美術部の管轄。

「これら様々な部署が全員揃つて打合せ
をして事を始めるからいい様なもの、忙
しくなつて来るとそうも参らない。で、撮
影当日、一齊に皆が顔を合わせてみたら、
衣装も帽子も靴も、部屋の壁紙もベット
カヴァーも、総てが鮮やかな、燃える様な
オレンジ色に統一されていた、という珍事

が発生した。全員が監督の願う、「燃える
様な恋の夕陽」を主題に、色彩を選んで
いたからである。今では撮影所システム
は遠くなり、「コーディネイター」という職種
が生れ、「こうした色彩設計はトータルにア
レンジされる様になつて来たのだが。

ぼくは広島県の尾道市生れで、海を挟
んで愛媛県にはよく遊びに行く。この頃で
は遠来の客があると今治までドライブ。
そして昔のタオル工場をリニューアルした
喫茶スペースに案内する。此處に展示され
ている様々なタオル製品のファンでもある
からだ。



文中の喫茶スペースではタオル雑貨なども販売している。

大林宣彦 映画作家

タオル色の、断章。



大林宣彦 Nobuhiko Oobayashi
広島県生れ。独立系映画作家。自らの古里尾道を始め、日本の古里を舞台に、町守り、町活かしの映画を作る。本年は伊勢正三の古里大分から『22才の別れ』、25年前の尾道映画『転校生』を信州長野で再生させた『転校生～さよなら、あなた』を夏に公開。04年春の紫綬褒章受章。尚美学園大学大学院教授他。



文明は常に新しさを求めるが、文化は古きことが尊まれる。愛媛「今治」のタオルには古い文化の物語がある。温故知新。古きを温める智慧「そが、愛媛」「今治」のタオルの豊かな明日を創造するであろう。タオルにすっぽり包まれて、ぼくは昔の子守唄を歌つてみる。赤ん坊は、古き良き唄によつてこそ、未来に向つて豊かに育つ。と、書いた所で、ぼくはシャワールームに立つ。そして……

タオルが工夫されて、身の周りにどんどん増えて来る、楽しいのは暮しの中での色彩が、うんと豊かになる事だ。実際、タオルの色合いは、本当に綺麗になった。日々の心模様に寄り添つて、好みの色のタオルに包まれてみるのもいい。きょうのわたしは何色かなあ、などと自らに問い掛けた。わたしの心が、見えて来る。タオルが対話を生み出す時、タオルは最早、単なる文明の道具ではない。むしろ暮らしの中の、文化でこそあるだろう。

文明は常に新しさを求めるが、文化は古きことが尊まれる。愛媛「今治」のタオルには古い文化の物語がある。温故知新。古きを温める智慧「そが、愛媛」「今治」のタオルの豊かな明日を創造するであろう。タオルにすっぽり包まれて、ぼくは昔の子守唄を歌つてみる。赤ん坊は、古き良き唄によつてこそ、未来に向つて豊かに育つ。と、書いた所で、ぼくはシャワールームに立つ。そして……

ア

ナウンサーという仕事をしていると、毎日

お褒めの言葉もあるにはあるが、「早口でいろんな方から様々な意見が寄せられる。

「ニュースが聞きづらい」といたお叱りの言葉から「目の下のクマが気になる!」「今日は右の目尻がおかしかったが病気ではないか?」(単に化粧が下手なだけかと;)など、それはもう多種多様な意見が届く。その度に改善できる」とは改善し、どんな意見も前向きにとらえてがんばろうと思つてはいるのだが、落ち込むことも少なくない。

そんな、気分が落ち込んだ、ある日のことだった。身も心も疲れてくたぐた。さりとて家に直行する気にもなれず、目的もなくデパートの中をうろうろしていたときのことだ。なんとなく通りかかった7階タオル売り場で突然一枚のタオルが私の目に飛び込んできた。鮮やかなパープルのタオル。とうてい日本人は好みそうな真紫色のバスタオルである。それは特売品ワゴンの中でひときわ目だついた。「こんな色だから売れ残つちゃつたのね」と、まるで捨て猫を見るような気分になつてしまつたのだが、なんだか、落ち込んで袋小路に迷い込んでいる自分の姿を見ているようで、手にとつて眺めているうちに、つい購入してしまつた。表がタオル地、裏はガーゼという、これまで見たことのない初めて出会うタオルだった。

その一枚のタオルが私のタオル人生を変えることになる。(そんなものがあるのかどうかわからない)タオルには全く興味のなかつた私なのだが、その性能の良さつたらしいのである。とにかく気持ちがいいのだ。薄手で吸水性抜群。身体に添うようにしなやかで、乾きも早い。「こんなタオルがあったのか!」と目からウロコの大感動。翌日タオル売り場に直行し、残つてある紫タオルを買い占めて、愛媛の実家にまで送りつけた。

「もうパパつたら、あのタオルしか使わないぐらい気に入っちゃつてるのよ」と実家の母も大絶賛。みんなしてガーゼタオルのとりこになつてしまつた。

さて、おつちよこちよいの私は、相も変わらず落ち込む日々である。実は今日も「赤穂四十七士(しじゅうしちし)」を思わず「よんじゅうしちし」と読んでしまい、すぐに気づいて訂正したもののクレーム殺到。ああ、またやつちやつた…。大反省。でもいつまでも落ち込んではいられない。シャワーを浴びてガーゼタオルで元気を取り戻さなきや。そしてまた明日からがんばろうと、心に固く誓う私なのである。

目からウロコの 捨て猫タオル

武内陶子



武内陶子
Toko Takeuchi
愛媛県大洲市出身。91年NHK入局。朝のニュース番組「おはよう日本」で人気に。03年紅白歌合戦の総合司会を務める。「お元気ですか日本列島」「日本のこれから」などに出演中。



MAYA MAXX

画家。1961年 愛媛県今治市出身。
早稲田大学教育学部卒業。「93年に初の個展『COMING AND GOING』を行う。以後、毎年個展を開催。99年の原宿ラフォーレでの個展では1万人以上の動員。若い世代を中心にMAYA MAXX人気がブレイク。吉本ばなな、山田詠美、北川悦吏子、夢枕満、他多数の表紙やイラストを提供。チャラなどのCDジャケット、サントリー「マグナムドライ」のCMなどにイラスト提供。また、NHK「真剣十代しゃべり場」「ポンキッキーズ」のテレビ出演など幅広く活動。

そ
れはもしかしてタオルの町、今治に育つたからかもしれません。子どもの頃友達の家に遊びに行くとそこにはタオルの小さな工場で、ガチャンガチャんと音をたてて機械がどんどんタオルを織り上げていく様子を飽きたくなく見ていました。無機質な機械が縦横の糸をふわふわのタオルに織り上げていくのが不思議でしたし、今思えば機械の踊るような騒々しい音に昭和40年代の活気を子供心に感じとつてわくわくしたのかもしれません。

この間友達のセキユリヲというデザイナーがタオル

そもそも私は
タオルというものが
好きなんです。

MAYA MAXX

を作つて展示会をするといつので見に行きました。彼女は日本のいろいろな分野の素晴らしい技術と情熱を持った職人さんとコラボレーションをしています。職人さんたちの持つ技術に彼女の現代のセンスを加味すること、少し現代の人々の生活やニーズから離れてしまいつある製品を甦らせるという努力をしています。その展示会に行ってみると、まさに彼女がタオルでコラボレーションしていたのは、我が今治のM社でした。細い上質な糸を使い、丁寧な卓越した織りと草木染めで染め上げたタオルはつややかして柔らかく、でもこしがあってふくらと美しいものでした。私はバスタオルを一枚買いました。生産数が少ないこともあって正直少し高いなーと思う値段でした。でも帰つて一度洗つてから使ってみて、高いなーと思ったことをお詫びしたくなりました。最初からしつくりと水を吸い、柔らかく体になじみ、厚手なのにかかわらず乾きがよく最高の使い手だったので。これが今治の技術で、これが本当のタオルなのだと感動しました。今治を誇りに思つてそれを見出してくれたセキユリヲに感謝しました。

故郷のタオルの業界が苦戦していることは私でさえ知っています。そしてここにひとつ活路のヒントがあるのではないかと思います。日用品だからこそ、毎日使うものだからこそ少し高くてもいいから自分の為に本当のものを使いたいという人達に、その人達のニーズとアイデノティティーのポイントに合った品質とデザインを提供するといつことだと思います。安いものを大量にという価値観から、良いものを少しだけという日本人の価値観の推移にうまく沿っていく商品をプロデュースすることだと思います。そしてそれはもしかして故郷から都会に出て行った私たちが故郷に恩返しるべき仕事なのかもしれないな?とM社のふかふかのタオルを使ったびに思つています。

自社ブランドにかけた情熱

近藤憲司と

「コンテックス」タオル

文芸誌「どんどうび」／代表 阿部克行



近藤憲司は、大正四年四月二十一日、父の宗一は、昭和九年の五月、同じく生れた。

父の宗一は、昭和九年の五月、同

地に近藤織維工業所を設立、タオル生産を始めたのだが、彼が十歳の時、父が綿ネル会社の経営と米相場で失敗したため一家は塗炭の苦しみをなめた。

こうした苦境を見て宗一は育つただけに、事業家として自分がストアを切るに際して、特別な決意と心構えをもついたことは想像に難いことだろう。

昭和九年という年は、日本史的視野で見れば、先年「満州国」が誕生し、その傀儡国家の支配権を日本が強化しつつある時代であり、斯界に目を向けると、前年に県工業講習所が設立されて、染織技術者の養成が本格的に進められようとして、またタオル製織用の専用力織機が稼動はじめた時期にあたっている。

宗一の始業したタオル工場も、堅実経営のもと、着実に発展し、業界に頭角を現す。そこで、この時代に、

近藤織維工業(株)の近藤憲司会長は、今年93歳の高齢であるが、健康状態はきわめて良好である。今も三日に一度は会社に顔を出し、

子息の寛司社長に「会社に何か問題はないか?」ときまつて聞く。

それに対して「はい、順調にしています」と挨拶がわりに答える。

この数年は、そういった短い会話のやりとりで、お互いの「コミュニケーション」は成り立っている。

さて、この「人物評伝シリーズ」も十二回を迎えるが、すべて故人を対象としている。

が今回は例外として存命人に光を当てて記述することになった。

それだけ近藤憲司氏の斯界における功績が大なるものであると理解してもらつて結構だと思う。なお記述の構成上、以下、敬称は略させていただく。

理解してもらつて結構だと思う。なお記述の構成上、以下、敬称は略させていただく。

明治の初期に、四国で最初のキリスト教会が今治の地に設立されて以来、この地は西洋文明の発信地として注目され、数多くの人材を輩出した。そうした関係上、英語教

での地位を確立していく。

そうした最中、日本は「アメリカとの戦争に敗れ、終戦の日をむかえる。世情は一変し、松下電器も混迷を深める中、昭和二十四年、父・宗一の要請もあり会社を退職、近藤織維工業所に入所した。

憲司は即刻、松下的經營理念を自社で実行すべく、まず自社ブランドを創案した。社名の英語訳を

縮めて「コンテックス」というブランド名を登録し、松下時代に使っていた人気女優・岡田茉莉子をモチーフにして、大々的に新聞・雑誌等で「コンテックス」タオルを宣伝した。当時のタオル業界の常識からすれば、まったく破天荒の営業戦略だった。

それまでのタオル界は、問屋がブランドを持っていて、メーカーは販売してみれば問屋の販織り工場で、商業的には「影の存在」であった。そうした慣習を破り、「主役」の座において、大々的に宣伝したわけだから、業界に与えた

影響は、大きなものだった。そこで、

「コンテックス」タオルは、

その戦争に敗れ、終戦の日をむかえる。世情は一変し、松下電器も混迷を深める中、昭和二十四年、父・宗一の要請もあり会社を退職、近藤織維工業所に入所した。憲司は即刻、松下的經營理念を自社で実行すべく、まず自社ブランドを創案した。社名の英語訳を縮めて「コンテックス」というブランド名を登録し、松下時代に使っていた人気女優・岡田茉莉子をモチーフにして、大々的に新聞・雑誌等で「コンテックス」タオルを宣伝した。当時のタオル業界の常識からすれば、まったく破天荒の営業戦略だった。

それまでのタオル界は、問屋がブランドを持っていて、メーカーは販売してみれば問屋の販織り工場で、商業的には「影の存在」であった。そうした慣習を破り、「主役」の座において、大々的に宣伝したわけだから、業界に与えた影響は、大きなものだった。そこで、

「コンテックス」タオルは、

その制度は今日まで残らぐ」となくつづき、「コンテックス」というメーカー・ブランドを消費者に浸透させ、同時に近藤織維工業(株)を業界屈指の優良安定企業に成長させた根幹となつていて。その制度は今日まで残らぐ」と

その制度は今日まで残らぐ」となくつづき、「コンテックス」というメーカー・ブランドを消費者に浸透させ、同時に近藤織維工業(株)を業界屈指の優良安定企業に成長させた根幹となつていて。「メーカーにとって一番大切な」とは、「コンテックスブランドによるヒット商品の開発です」

現社長の寛司氏は明確に言い切る。そして、「メーカーが主導権を持つ。それは商品に責任を持つということにつながります」

父・憲司の經營理念は、確実に次



■近藤織維工業株式会社
〒794-0083 今治市宅間甲854-1
☎0898-23-3921
<http://www.kontex.co.jp>

育熱の高まりは他の地域を圧倒していく。男子は京都の同志社大学、女子は神戸女子学院に進学し、各界の指導者の立場につき活躍していた。近藤宗一の長男・憲司も、そうした周囲の影響をうけ、青雲の志を抱いて同志社大学に進学し、建学の祖である「新島精神」を学んで、昭和十四年に商学部を卒業した。就職先としては迷うことなく「ナショナル」ブランドで有名な松下電器を選んだ。入社後、幸運にも社主である松下幸之助に特別の知遇を得、企画課長、次長、建設部長へと、まっしぐらに出世コースを駆け昇つて行った。

就職先としては迷うことなく「ナショナル」ブランドで有名な松下電器を選んだ。入社後、幸運にも社主である松下幸之助に特別の知遇を得、企画課長、次長、建設部長へと、まっしぐらに出世コースを駆け昇つて行った。



昭和初期の様子

そうした最中、日本は「アメリカとの戦争に敗れ、終戦の日をむかえる。世情は一変し、松下電器も混迷を深める中、昭和二十四年、父・宗一の要請もあり会社を退職、近藤織維工業所に入所した。

憲司は即刻、松下的經營理念を自社で実行すべく、まず自社ブランドを創案した。社名の英語訳を

縮めて「コンテックス」というブランド名を登録し、松下時代に使っていた人気女優・岡田茉莉子をモチーフにして、大々的に新聞・雑誌等で「コンテックス」タオルを宣伝した。当時のタオル業界の常識からすれば、まったく破天荒の営業戦略だった。

それまでのタオル界は、問屋がブランドを持っていて、メーカーは販売してみれば問屋の販織り工場で、商業的には「影の存在」であった。そうした慣習を破り、「主役」の座において、大々的に宣伝したわけだから、業界に与えた影響は、大きなものだった。そこで、

「コンテックス」タオルは、

その制度は今日まで残らぐ」となくつづき、「コンテックス」というメーカー・ブランドを消費者に浸透させ、同時に近藤織維工業(株)を業界屈指の優良安定企業に成長させた根幹となつていて。その制度は今日まで残らぐ」と



当時の広告

■コンテックス タオルガーデン
今治市宅間甲854-1
☎0898-23-3933
10:00~18:00、月曜休



当時の織物工場を、タオル雑貨ショップと日本茶喫茶に改築したコンテックス タオルガーデン。



波止浜港の沖に浮かぶ来島。
この港から、大型船が世界へ出立つ。

戦国時代、瀬戸内海で名を馳せた海賊衆に、村上水軍があつた。一般に同水軍は3系統に分かれ、因島・能島・来島を拠点に活動したことから【三島村上水軍】と称される。当時の人々は、彼らを【村上海賊衆】と呼んだ。

海賊の頭領、村上通康

地域史愛好家 大成経凡

別宮大山祇神社・拝殿(今治市別宮町)。1575年に来島通総が造営。愛媛県重要文化財。

輝きのクライマックスは、中国地方の満たない小島で海路をにらむ要所に位置する。こうした【海の城】は、戦闘よりも交通管制や入港管理を重視したと思われ、古文書が記す来島・能島城は来客をもてなす迎賓館として描かれている。

彼らは海上権益に生きたことから、海の視点と実像を把握は難しい。

海賊は、頭領のもと血縁地縁・利害関係などで結合し、一団(衆)を形成した。村上通康(五五九)五六七が頭領に就くと、来島海賊衆(以下、来島衆)は輝きをます。彼は、時の伊予国守護・河野弾正少弼(だんじょうしょひき)通直の娘婿となり、守護の嫡女とされる(来島城の城下町は、今治平野北岸の大浜地区)。隣国の脅威に対し、通直は来島衆の力を頼りとしました。

海賊衆はあくまで傭兵(よひん)に過ぎず、平時は海上輸送の担い手であった。それゆえ、戦国の海戦でスポット的に彼らの名が登場する。この戦い以降、毛利氏は通康への接近を試み、伊予との交渉を行った。河野氏の居城道後湯築城(道後公園松山市)跡からは、通康が守護補佐役にあつた時期に、海上交易を行う陶磁器が最も多く出土している。

テキスタイルレポート Vol.9
今治
Towel&Toweling
発行日/2007年3月
発行/株式会社今治織維リソースセンター
〒794-0033
愛媛県今治市東門5-14-3
テクスポート今治
☎0898-23-8700
監修/四国タオル工業組合
印刷/株式会社

murakami suigun



この結果、最後まで死守した本領一野間郡の部と風早郡を合わせた1万7千石(菊間と北条中島地域)一のが、秀吉から来島兄弟へ安堵された。能島に組み込まれ、秀吉の海賊禁止令で解体へと向かつた。

戦国乱世を生きた来島海賊衆

く海から見た村上水軍史く



海賊衆から近世大名へ

通総は豊臣大名の一門に列し、日本水軍の一翼を担つて朝鮮攻めにも参加した。この戦いで、来島兄弟は異国の海で亡くなり、通総の子・康親(やすちか)が跡を継ぐ。関ヶ原の戦いは、西軍に従つて領地を奪われるも、大坂商人らの力を借りて、六〇年に豊後森1万4千石の領主に返り咲いた。城下町は、海とは無縁の山間部にあり(大分県玖珠町)、六一年に姓を【来島】から【久留島】へと改めている。伊予の戦国武将で、近世大名として生き残るのは、久留島・来島村上氏だけであった。

今日、村上海賊衆のふるさと・今治市は、平成の大合併で海運造船産業が集積する世界有数の海事都市となつた。海に生き飛躍する姿勢は、時代を越えても変わらない。この戦いで、来島衆は、平成の大合併で海運造船産業が集積する世界有数の海事都市となつた。海に生き飛躍する姿勢は、時代を越えても変わらない。

けれど、思い出深い旅の記念として、私にとっては大切なものになりました。それにしても、買った時には、このタオルをこんなにも大切に思い、大好きになるとは思いもよらないことでした。

私たちたちはそのタオルをすいぶん活用したものです。水浴びをした後に身体を拭くだけでなく、枕の代わりにしたり、

生活の中のタオル 海外の暮らし no.09



アメリカ編

United States of America

リック・ネルソン



一枚のタオルとターバンの思い出

私のお気に入りのタオルには鮮烈な思い出があります。一カトマンズの午後の町並み、木の座席で揺られながら乗つた長距離列車、川で洗濯する村の女性、露天の井戸で水浴びしようと並んでいる町の人々ーそのタオルを見るだけで沢山の記憶がよみがえってきます。

1983年、私は日本に住んで2年半になり、日本人の妻と結婚していましたが、二人でアメリカに住むために帰る途中、太平洋を越える代わりに長い回り道をして、アジア、ヨーロッパをバックパック旅行することにしました。年を取つた今となっては、二度としようとは思わない冒險に満ちた旅でしたが、妻も私もそういう経験が出来たことを幸せに思っています。

アメリカと日本の国外を旅することについてはあまり知識もなく、タオルを持つて行くのをうっかり忘れてしましました。現地で買くくらい簡単だと思うでしょうが、インドでは何を買うにも値切るのが常識です。タオルも用が済めばすぐに捨ててしまうだろうと思いながら、仕方なく数枚買ったのでした。いくらで買ったか正確に覚えていませんが、



多分一枚、一ドルくらいだったでしょう。ぼろぼろになっているし、ちっとも綺麗ではないけれど、思い出深い旅の記念として、私にとっては大切なものになりました。それにしても、買った時には、このタオルをこんなにも大切に思い、大好きになるとは思いもよらないことでした。

バスや列車の硬い木のシートの上に敷いたり、また、水か食べ物にあたって病気になったときには、腹巻として使つりました。そして、私の一番好きな思い出は、ターバンとして使つた時のことです。

私たちはプーシュカーと言うところを目指して、列車を乗り換ながらインドを縦断していました。列車ごとに指定席を買つていましたが、最後の列車に乗り換えた時、車掌が、私たちが指定席の車両に乗るのを拒否しました。未だに理由がわからないのですが、私が彼に“バーシュキー

シュ”と呼ばれる小額の賄賂を渡さなかつせいかもしれません。彼は私たちを、ぎゅうぎゅう詰めの最後尾の車両に案内しました。しかし、中の乗客が言

うには、その車両は途中駅で切り離されるので、もつと先の駅まで乗りたいなら、前の車両に乗りるべきだと言うのです。頭にきた私は、列車の屋根にのぼることを思いつき、目的地に着くまでそこで時間を過ごしたのでした。

地上の人々は、汽車の屋根の上にインド人のいでたちを見つけて手を振ってくれ、それが、私の気分を和らげてくれました。

インドでは、“帽子を被らないのは、頭を金づちと同じに扱っているのに等しい”と言います。専用特等席ながらの見晴らしのいい汽車の屋根の上で胡坐をかき、私たちたオルを取り出し、頭に巻き付けてみました。その頭上のタオルのターバンがますます私たちを、インドのラジャ(王様)になったようなゴージャスな気分にしてくれました。